



言葉でつなぐドミニカ共和国と日本 時と海を越えた二つの想い

—嶽釜 徹 × 松永 K 三蔵 対話録

交差する言葉、交差する人生——いま、二人が語る理由

戦時に朝鮮で生まれ鹿児島で育ち、18歳でドミニカ共和国に渡ったドミニカ日系人協会会長の嶽釜徹さん。

茨城県に生まれ兵庫県で育ち、様々な仕事を経験し、悩みながら書き続け、夢を掴み、小説家となった松永 K 三蔵さん。

一見交差点は無いように思える二人の道。

しかしその道には日本の大文豪の名を冠した賞の受賞者という共通点があります。

第 42 回（2008）吉川英治文化賞受賞者 獨逸さん

第 171 回（2024）芥川賞受賞者 松永 K 三蔵さん

獨逸さんの「ドミニカ共和国の日系社会の存在をより広く、多くの方々に知っていただきたい」という想い。

松永さんの「中南米・カリブ地域の日系社会をもっと深く知りたい。我々日本人の精神が異国之地でどのように根付いているのか感じたい。」という想い。

その二つの熱き想いを受け取った国際協力機構（JICA）が、日系社会連携事業の一環として松永さんをドミニカ共和国に派遣し、2025 年 5 月にドミニカ共和国のサント・ドミンゴで対面が実現しました。

バックグラウンドや世代が異なる二人ですが、悩み、考え、一生懸命に生きてきた先に今のお二人がいて、その対話の中にはそれぞれの異なる経験や共通の考えを見つけることが出来ます。我々の生きる上での糧となるであろう金言が随所に散りばめられた貴重な対話を是非ご覧ください。

第一章：

心に棲みついた一冊——あなたの“好きな本”は？

坂口：お二人の心に残っている作品はありますか？

松永：私はドストエフスキイの『罪と罰』です。母親から 14 歳の時に渡されまして、それまで本なんか読まない人間だったんですけど、それを読んで衝撃を受けて小説家になろうと思ったんですよ。その本が一番自分の中では大きいですね。それで本当に自分の人生が決まったんです。

嶽釜：僕は学生時代、どちらかというと遊ぶことに一生懸命だったからね。それでも色んな本を読みましたよね。母から隠れて大人の本を読んで怒られたという記憶もありますけど（笑）。僕はどちらかというと教科書をよく読んでた。何回も読んで、授業に参加して、先生の言うことを聞いて、黒板を見てそれを筆記して、というのを僕は人以上にやったんじゃないかなと思いますね。本もたくさん読んできただけも、特別この本っていうのはないかな。中学の終わりか高校に入った頃に宮本武蔵を読んだけどね。あとはもうほとんど教科書。僕が六年であれば五年以下の今まで習ってきた教科書をずっと僕は置いてましたからね。後は文部省が出してる本くらいでね。

松永：私も時代小説が好きなので、宮本武蔵は読みました。

嶽釜：それからね、本を読むということは、科学者と話をするっていう事だと僕は思う。小学校 6 年生くらいから、そう考えてた。先生が本を読むとはどういうことか聞いたから手を挙げた記憶がある。「本を読むってすることは、その科学者と話すことだ」って。僕がこう言ったら、先生は何も言わなかつたけど、頷いてくれたんだ。友だちは笑つたけどね。

坂口：それは感性ですよね、それを理解できるだけの素地があるかというところかと。素敵な言葉ですね。

松永：私もそう思います。例えばソクラテスとはプラトンを通して出会えますし、鷗外とも漱石とも出会えます。だから、本を読むって言うことは本当に会長と同じように、私も著者と対話する貴重な体験だと思っているので、それが広まってもらえばいいなっていうのは、常に思っています。

第二章：

人生が始まる音がした——“はじまり”の瞬間

坂口：人生が変わった瞬間、自分の始まりを教えてください。

松永：実は、それを聞かれると、おそらく芥川賞を受賞した時って言うことを期待されてしまうんですが、本当に変わった瞬間というのは、母親から「これを読みなさい」って『罪と罰』を勧められたときですね。それ以降、実は何も変わってなくて。親から受けたもの、自分の中に火をつけてもらったもの、好きなものを見つけて、書くっていうことを好きになって。その延長線上に賞とか、書く仕事というものがあって。だから受賞以前もそれ以後も本質的には何も変わっていません。受賞したことは一つかたちとして恩返しできたかなとは思うんですが、やっぱり最初に『罪と罰』と出会えたことが一番大きいですね。



嶽釜：僕はね、朝鮮生まれでしょう。小学校一年生の一学期に終戦で朝鮮から引き揚げた。やはり戦後に引揚げ者として日本に帰ってからの生活が、朝鮮での生活と完全に変わってしまった。戦時中、日本にいた人は苦労したんだなっていう印象を受けたしね。学校の放課後に先生に残され、精神修養の教育があったんですよ。生き延びてきた一人として、いつも思い出すのは、郷里の知覧特攻隊の、勉強も人生も盛りの時に亡くなった若い彼らのこと。僕は6歳でしたから、戦争が延びていたら、この世にいなかったかもしれませんしね。だから、郷里に帰ったら必

ず知覧特攻基地に行くんですけどね。裁判の頃も、祖先のお墓参りをして知覧特攻基地に行ってね。そういう生活の変化っちゅうのかな？朝鮮での生活が、あんまりにも戦争中とはいえ苦労しないで両親皆に可愛がられて育ったわけでしょ。それからすると日本に帰ってからの生活っていうのは、人生の中で大きな経験だったと思いますよね。



坂口：その不屈の精神や、どんな交渉でも恐れない、その非常にタフな精神を嶽釜会長が身につけられたっていうのは、やっぱり朝鮮時代の経験もそうですし、その後の日本に引揚げてきてからの経験からも、形作られているんでしょうね。

第三章：

働くということ——何のために働くのか

坂口：お二人にとって働くということは？

嶽釜：働くということは、自分の家庭を守るっていうことがまず第一と、常に我々移住者、同胞も喜び、みんなが良くなるために働くんだっていうのが、僕の根本的な精神だな。

松永：「働く」ということを私は小説の中で必ず書いていて、よく訊かれるのは「なぜ働く人を書くんですか」ということなんんですけど、私は生きることを書くのに働くことは不可欠だと思っています。生きている以上働き続けなければならない、そこから目を背けることはできない、生きるということは働くということだと私は思うんですね。一つお伺いしたいのは、会長のご経歴を見ていると、実

務家として非常に豊かなご経験をされていらっしゃることがわかります。その能力で仕事に専念したかったと思うんですけれども、ドミニカ共和国の移住問題を中心になってやるってことは非常に大きな負担になる部分でもあり、ご自身の仕事に集中するのが難しかったと思うんですよ。それを突き動かした、お父様からの「頼むぞ」の一言は本当に大きくて重いものなんだなと。それから、移住後、ドミニカ共和国内で、頭だけじゃなく体を動かして様々な地に赴いて交渉のご経験積まれたことが、訴訟や日本政府との交渉に全て活きてきたと思うんです。でも、やはりご自身の事業のためにその能力を使えたんじゃないのかなって思って、そのあたりの葛藤があったんじゃないのかなと思うんですけど、どうですか？

嶽釜：まあ、おっしゃる通りだと思うな。親父が日本を出るときから移住者の先頭になるって言うのを日本政府から言われてきてるわけですから、親父は自分の家のことをした男じゃないんですよ。あとは僕と母親に任せっきりで。ダハボンに入植してから親父と喧嘩したことがあるんですよ。もうあんまり腹が立って親父を叩こうとしたら、弟が後ろから飛んできて、止めてくれて。そういうことしたにもかかわらず、今度は自分は親父と同じようなことをやってるわけ。

松永：反発してもおかしくなかったですよね。

嶽釜：あの当時、若いもんはみんな日本に帰りたくて帰りたくてどうしようもないですから、みんな集まつたらどんなにして日本に帰るかっていうようなことばっかり話をしとったわけです。勉強したかったのに、できないじゃないですか。じゃあ一体全体に何をすればいいのか。仕事をすると言ったって、土地はない、水はない、電気はない。勉強もろくろくできん。ドミニカ共和国に来てから僕はすべて独学ですね。そうせざるを得ないわけですよ。昭和43年、当時鹿児島の南日本新聞というのを県庁から船で一ヶ月、二ヶ月ぐらい遅れて送ってきよったんですよ。それを見た時に、東京農大の通信教育が出てたんで、僕は受け始めたんです。それも長続きはしなかった、というのは、ドミニカ共和国が経済封鎖にあって、学費を送れなくなって、最後までは卒業できなかった。もっと勉強したかった、というのは今でもありますね。

松永：いま日本では無関心というか、それこそ自分さえ良ければいいというような、よくない意味での個人主義が傾向としてある中で、会長が自己犠牲をしながら同胞の移民のために戦った、こういう事実は、とても興味深いことだと思うんですね。

嶽釜：裁判だって、全部が全部みんなで払ったわけじゃないし、みんなから旅費の一部分は集めはしましたけど、残りは全部自費です。

松永：お金も時間もかかりますもんね。大変なご負担がありましたよね。

嶽釜：だから、僕がこんなことができるのも、やっぱり妻子が頑張ってくれてるんだと思うな。本当に妻子に対しての感謝ですよ、僕は。

第四章：

家族とは――

嶽釜：家族とは僕の宝だな。宝であり、家族がなけりや、僕が今やってるようなこともできないんじゃないですかね。自分の子どもと孫までは、僕は抱っこしたことがないんです。今、ひ孫が生まれてようやく抱っこを出来るようになりました。そして今度はもう毎日抱きたいんですね。それぐらい家庭をほっぱらかして、いろんなことをしてたって言うことなんですね。家族のためじゃなくて、みんなのためにっていうのが僕のやり方だったもんだからね。だからそれを全部支えてくれた僕の家族は宝であり、もう僕は家族に頭もあがらんですよ。感謝感謝ですよね。そう言いながらも僕が家長だから、守らなきゃならんのは僕の責任だしね。だけど、家族っ



ゅうのがあって…、いいところがあるなあ…。家族がなければ、こんなにして苦労しながらも、生活する意味が見つけられないんじゃないですかね。

坂口：林監督のドキュメンタリー作品¹の一番最後に嶽釜会長が「いい家族ができました」っていうので締めくくっておられて、本当に素晴らしい言葉だと思っていまして、ドミニカ共和国の日系社会みんなが会長の家族みたいな、約70年間でそういう社会ができているっていうのがすごいことで、ただ日本のみなさんはそういうのを知らないし、なかなか感じられない。そんな中で、いろんな形でこの素敵なかつて、「家族」の存在を知ってもらえたなら、と思っています。



嶽釜：さっき松永先生が言っておられたように、日本で暮らしていた時はみんなのためにと思って生きてきて、そしてドミニカ共和国に来て、移住者と生活してこの同胞のためについている気持ちが、なお強くなつたんじやないかと自分で思いますね。それは本当に自分から湧き出るようなものであって、誰もしてくれとは言わん。だけどやっぱり、毎日の苦労をお互いに見てれば、これはいかん、これはこうせんといかん、そういう気持ちになっちゃうってことかな。

松永：日本人は辛くとも、なかなか自分から「助けてくれ」と言い出せないじゃないですか。それがわかっているからこそ会長も手を差し伸べられたんだと思うのですが、ドミニカ共和国に来て頼るべきところもなくて、心細い家族が大勢おられたと思うんですよね。

¹ [【ドミニカ共和国・平和構築/移民】ドミニカ日系移民インタビュー2024/Entrevista a inmigrantes japoneses de la República Dominicana 字幕付 , Youtube JICA 国際協力機構](#)

嶽釜：日本だったら笑われるかもしれないけれど、ここに来たら少しはみんな移住者が、僕を頼ってくれるっちゅうのかな。頼られれば頼られるほど、なお頑張らなきやいかんという気持ちになる。だから、どんどん深入りしていくんじゃないのかなっていう気もするんだよな。

松永：でも、その影にはやっぱり家族の存在っていうのがあったんですね。

坂口：松永さんはどうですか。

松永：小説家というと個人、ひとりというイメージが強いのですが、私は自分にとって家族の存在が大きいということをずっと伝えていて。私のペンネームも全部家族からの名前です。三蔵は私の祖父の本名なんです。

嶽釜：「K」というのは？

松永：Kっていうのは、収めきれなかった家族たちの名前です。一番多かったファーストネームのイニシャルが K で、そこから取りました。私が小説を書こうと思ったのは、母から本を紹介してもらって。その母が一番尊敬していたのが祖父“三蔵”です。私の祖父は茨城県の人間なんですけど職業軍人でした。すごく家が貧しくて、勉強できる場所を求めて、軍隊の工兵学校に入りました。士官として戦争にも従軍したんです。祖母が実はすごく良家の出身で、貧しい家の祖父とは釣り合わなかつたんですが、当時の軍人だということで良家の祖母と結婚できました。ただ、戦争が終わって台湾から引揚げてきて、将校だったので公職追放ということになって普通の仕事にはつけないっていうので、祖父の方から離婚を切り出したそうです。それでも祖母が別れなかつたので、私がいます。海岸の塩を集めたり、里芋を作つて水飴を作つて行商したり、そういう苦しい生活の中で家族を養いました。そんな祖父の苦労を母から聞いて、その家族の物語が自分の中に生きていますね。だからペンネームは私なりの返答だと思っています。そして家族から受け継いできたものが、自己の中でとても大きなものです。私も結婚して娘が一人いるんですけども、自分の娘に、何を伝えていけるのかなと思います。自分の中では小説を書く、ものを書く。いずれ自分が死んだ後も娘はそ

れを読みます。読んでどう思うのか、娘に読まれて恥ずかしくないものを書いていきたいなという思いが一番強いですね、そういう存在です。私も会長と同じように、自分が好きなこと、自分が本当好きにさせてもらっているのは家族のサポートというものが大きいです。本当に有難いです。



坂口：バリ山行に出てくる家族像は？

松永：全くそのままっていうのではないんですけど、結構近いところはありますね。

嶽釜：家族っちゅうのはやっぱり大切にせんといかんなとつくづく思う。でも僕は恥ずかしくて言えない、子どもにも家内にも言えんけど、自分が今まで好き勝手なことをやってきてるけど、それを黙って見てきてくれたのは、やっぱり家族です。家族だから、それをやってくれたんだよな。

松永：でも、会長の背中っていうのは絶対家族が見てますからね。

嶽釜：人のことばっかりやって、って思ってるかもしらんけど、子どもたちも黙って何も言わないしね。僕は親父に対して喧嘩まで吹っ掛けたけどね。子どもたちはわかってるだろうけれど、何もそれについては言わない。家内も言わないしね。ただ家内が言っているのは「あんたもう会長をやめなさい」って、もう何年も前から言ってるんですよ。だから定期総会を毎年やってますけど、その度に、僕はもう世代交代にもう前から入ってるんだよ、ということを言うんです。だけど、誰もそれを拾ってくれないんですよね。物の考え方っちゅうのは、時代の差で違うんだから、若い人たちの考え方をどんどん入れていかないと。ところが若い者は、僕と同じようなことがやれんって言うから。十人十色でそれぞれの意見があるのと同じように、同じようにはいかないんだけれど、二世、三世が、

会を運営していかないといかないんだって。だけど交渉ができんちゅうわけだな。だから僕はできる時までちゃんと手伝ってやるって言ってる。心配だったら言ってくれと。僕が一緒に行ってあげるよって言っても、ダメなんだよなあ。

松永：なかなかのプレッシャーなんでしょうね。会長の名前が大きすぎて。

嶽釜：それを言われたの。家内が「あんたが一人なんもかもやってしまうから、そんなんなってしまったんだ」ってね。

松永：いや、まあ、なってしまったとは言えないけど。

嶽釜：うん。だから責任はあんたにあるんだっていうわけ。一生懸命やってきて、今度はうまくいかんの責任も僕に持ってくるんだもん、どうしようもないじゃないって。



第五章：

生きるという、果てしない問い——“生きること”を語る

坂口：三蔵さんの本のテーマにもなっていますが、生きるということはどういうことでしょうか？

松永：生きるということ、これは幸福論につながってくることですが、幸せって何かと問われたら、やっぱり自分が夢中になっている状態のことだろうと思うん

ですよね。私にとってはやっぱり書くこと、創作するということが夢中になれることなので、それが自分の幸せであると思いますし、生きることだと思います。それはもちろん人によって何でもいいと思います。会長のお話を伺いしながら、どうしても人の世話をしてしまう、そのためにその能力を使う性分とおっしゃいますけど、やっぱり、それもひとつの夢中のかたちだと思いますし、とても素敵なお生き方だと思います。

嶽釜：だいたい僕も生きるってことは松永先生と同じように解釈ですね。それは家内やら、子どもたちにすれば、反対あるいは、面白くないかもしらんけど、今僕がやってること、それが、やっぱり僕の生きがいだろうと思うしね。家内なんかは「あんた一生懸命、そんなことやってる。それがあんたの生きがいかな？」なんて時々言うんですよね。そういう時は、すまんなあと思いながら、でもそれが僕の生きがいだろうなって。生きるってことは、自分がやりたいことを、本当に最初から最後までやれる。それによって家族、友達、同胞たちが気持ちよく生活していくんであれば、それに越したことないなって考えるもんだからね。だからやっぱり、先生がおっしゃるように、自分のやりたいことをぴしゃっと最初から最後までやる、全うするっていうのが、僕の生きがいであると、僕は思いますね。

松永：若い人に伝えたいですね。そういうふうに生きてこられて、結果的に日系社会の皆さんになるし、中南米全体に広がる影響力につながっていくことですから。

嶽釜：最近は、なんとなくみんな利己主義的になっちゃってね。自分さえ良ければ良い、自分さえ儲ければ良い、そういうような方面に走りがちだと僕は思うんですよ。ところが、我々逆ですね。



坂口：生きるということは、夢中になれるこことを思いっきり出来ることだ、ということでお二人の意見は概ね重なったかと思います。さて、松永さんの場合、50作書いて今出版されてるのは2作という話なんんですけど、夢中になることをできなかつた時代もあるということですね。どうやって書くことを仕事にしていくるようになったのか、どのように取り組んできたからそこに繋がってきたと思いますか？

松永：努力しても、中々結果が伴わないということも当然あると思うんですよね。本当に長い間、耐え忍ばないといけないこともあると思うんですけど、ですが一番重要なのは、本当に自分がやりたいことということで、何か見返りがあってやるわけではないことだと思います。もし何も結果が出なくても、自分が大切に思うことをやり続ける。結果的に私は評価していただいたら、デビューをさせていただいたりしましたが、無論、それがゴールではない。やっぱり大切なのは、坂口所長が転機っていうのを聞かれましたけど、自分の中の転機は賞をいただいたことではなくて、一番最初に興味を持って走り出したそのことが転機なので、それは外からは奪われない。自分の母から受けた財産です。それは変りません。変わらないものがあるっていうことが、やっぱり幸せなことかなと思うんです。

嶽釜：そうだよな。僕は同意だな。

松永：会長も誰かから評価されるために助けたりしたわけじゃないじゃないですか。ほっとけないからやった、それだけですよね。

嶽釜：そういうことを僕はもう考えたこともないしね。なんか見返りがあるだろうとかね。一つは自分のためなんだから。だから、自分が思ったことを、この世でやれるだけのことを自分でやる。先生と僕は同意だ。

松永：だから会長が信念を持って裁判を起こしたとき、移住者の皆さんからは「会長一任します」っていう同意が得られたんだと思うんですね。



嶽釜：まあ、そこを見てくれたと思うんですよね。先輩方が「祖国を訴えたたくない」と言ってあれだけ泣きながらもサインをしたっていうことは、やっぱりいかに僕に自分らの命を預けたかっていうのと同じだもんな。それだけのことを預けられたら、なおさらのこと自分がやらなきゃいかん。手を広げてみんなのことを考えなきゃいかん。「ああ、僕一人じゃない。大きな家族を僕は守っていかなきゃ」なんて、ますます元気が出るって言ったらおかしいかもしらんけど、責任感もものすごく出てきますし。必ず成功させると。自分の経験からして、今でも言う、真実というのは必ずいつか認められるもんであるということを僕は言い続けるわけですよね。それ一本で、僕は来たつもりなんです。

松永：そこにみんな心惹かれるんだと思います。強いリーダーが組織をつくっても空中分解したり、計画を立てても、いろんな声で潰れたりするってことが結構あるじゃないですか。組織の中でリーダーになる人の責任感や思いというものは、みんなが見抜きますから。私も会社員時代に、そういう失敗例をいっぱい見てますが、一致団結して成し遂げられたということはやはりすごいなと思うんですよね。

嶽釜：日本でも言われました。もちろん弁護士自身からも言われたし、尾辻さんからも言われた、「嶽釜さん、よう一人の脱落者も出さんでまとめてきたなあ」って。



【まとめ】それぞれの作品に込めた想い

坂口：それぞれの作品について、どういうことを伝えたいと思って作り出したのか、書き出したのかということを教えていただきたいと思います。

嶽釜：僕の場合は、本当に移住者の事実をみんなに知ってもらいたい、というのが50周年史「青雲の翔」²の目的ね。今まで周年記念史はあったけど、僕はこれで少しでも事実をみんなに分かってもらいたい、移住者の本当の声を読んでもらいたいという想いでした。

松永：本当に意味深い一冊ですよね。ドミニカ共和国に限らず中南米全体の移民の人たちに通じる物語だと思いますし、こういうことに関心を持って学んでいく人たちのためにも貴重な一冊になると思います。

松永：私の小説「バリ山行」というのは、普通の登山の道から外れる、道じゃない道を行く物語なんです。何を感じるかは、読む人にお任せしたいっていうのはあるんですけども、道は一つじゃない、決められた道っていうものはないっていうことは一つの見方としてあると思います。本来、山も元々登山道というのではなくて、それこそ、まさに中南米の何にもないところから一步、一步、歩いて行った方々に学ぶところが多いんですけども、自分たちで作っていく、生きることの本質はそういうことだと私は思っています。前例のないことを恐れずにチャレンジしていく。そうすると、既成の組織から叩かれたり、反対されたり、いろんなこと言う人がいるんですけども、それでもやっぱり自分も信じたものを貫いていく。その先に何かあるんじゃないかなっていう想いを常に私は持っているので、そういうのを小説にしました。

嶽釜：すごい。すごい。それがないとダメだ。

² 青雲の翔：ドミニカ共和国日本人農業移住者50年の道 | NDLサーチ | 国立国会図書館

松永：会長をはじめドミニカ共和国に移住されて開拓されてきたというのは、本当すごく象徴的だと思うんですよね。海外の地の中でも、ここドミニカ共和国はバイタリティとか力強さとか、そういうものを本当に学べるところなんだな、と思います。私は今、日系の方が登場人物として出て来る小説を書いてるんですが、また別に、今回ドミニカ共和国を取材させていただいた経験を題材にした作品も書いていきたいなと思っています。

嶽釜：すごいな、先生。

松永：会長はじめ、移住者の皆様がドミニカ共和国で歩んでこられたの道を、我々が会長の著書で読ませていただいて、そこから受け取るものというのはとても大きいなと思いました。そしてそれが今、日本に暮らす人を勇気づけるものだと思います。これから時代を生き抜いていく中で、移住者の皆様の経験は本当に意味深いと思いました。



対談：2025年5月16日サント・ドミンゴにて